飛び立つ抱負―

「障がいのある人から頼られる作業療法士になりたい」

水谷 晴香さん

Suitani Haruka

私は今、作業療法士を目指し、滋賀の専門学校で勉強しています。

作業療法士を目指すようになったのは、小学校から高校まで取り組んだバスケットボールでたくさんけがをして、不便さを経験したことがきっかけでした。

けがをしているときは、バスケットどころか、日常生活での段差や階段さえ大変でした。その間は、家族や友達、学校の先生などにお世話になりながら生活をしました。

こうした経験から、障がいのある人が、なるべく不自由なく、楽しく生活できるように支えていきたいと考えたことと、生まれながらにして障がいのある人にとって、これまでできなかった動作を一緒にできるようにしていきたいと考え、作業療法士を目指すようになりました。

しかし、専門学校での勉強は専門的で難しく、一人暮らしで家事などにも追われるため、目標を見失ったり、面倒になったりすることが何度もありました。そのようなとき、作業療法士を目指した理由を振り返ると、障がいのある人は、さまざまな工夫をして生活しているのに、勉強が難しいとか、洗濯が面倒と言っている自分の意志の弱さが情けなく、それ以上に、恥ずかしさを覚えました。

そして、昨年の3月には、東日本大震災がありました。被災地の人々は、不自由な生活が今なお続いている中、現状を受け止め、復興に向けて前向きに生活を送っておられると思います。今、自分に何ができるのか。そのことを胸に深く刻み込み、私も前向きに生活を送り、将来、障がいのある人から頼られるような作業療法士になりたいと思います。

今まで、漠然と作業療法士になりたいと思っていたのですが、この発表を機に初心に帰ることができ、しっかりと目標を確認できました。また、家族、友達などに支えてもらいながら、ここまでこられたことに改めて気付き、感謝することもできました。本当にありがとうございました。

「自分がかかっても安心できる医師になりたい」

竹安 航さん

Takeyasu Wataru

私は、「一期一会」という言葉を、とても大切に思っています。お世話になった先生方、一緒に学び、努力し、遊び、笑い合った多くの友人。生まれてから今までの出会いがあって今の自分がいると思うのです。そのすべての出会いに感謝しています。

実は、そう思えるようになったのは、父からもらったある言葉がありました。それは、「どんな人間も100人中100人の人間から好かれることはありえない」という言葉です。

それまでの私は、他人の評価ばかりを気にし、人付き合いに悩んでいました。自分とは違う考え方の人や、自分の中にあるみんなと違う部分を、恐れていました。そんな時、この言葉をもらい、私は、自分の他人とは違うところも、また、自分とは違うさまざまな考えを持つ人のことも、認めることができるようになりました。父をはじめ家族からは、ここでは語り尽せないほどの多くの愛情をもらい、ここまで育ててもらいました。家族には、言葉にできないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。

今、私は、誰かの役に立ち、人に必要とされる仕事をして、生まれ育ったこの鳥取県に恩返しがしたいと思い、医師になることを目指して勉強をしています。しかし、医学部に入ったところで、ほっとしてしまっている自分の存在も否めません。昔から、現状に満足するところがあり、それが治っていないことを反省しています。

私の目標は、自分がかかっても、安心できる、信頼できるような医師になることです。そうでなくては、人から信頼されるような医師になれるはずはありません。このたびの機会に、自らを振り返り、もう一度気を引き締め、さらに高みを目指して、勉強に努めたいと思います。

私たちは、2011年という、あまりに多くの変化があった時代の中で、成人を迎えました。社会的にも責任のある立場になります。本日この場でこれからの時代を担う世代としての自覚を持ち、行動していくことを誓い、抱負の言葉とします。

飛び立つ軌跡―

成人式会場スナップ

飛び立つ記念―

河北中学校区

東中学校区

西中学校区

～近所の新成人に「おめでとう」と声を掛けることから始めませんか～

懐かしい友人、近所のあの子は、見つかりましたか？

久米中学校区

鴨川中学校区

取材を終えて

式典では、萩原俊郎さんが保護者を代表して、娘さんと新成人にメッセージを贈りました。

▲萩原俊郎さん

とても心を打たれたので、それをご紹介します。

萩原さんは、娘さんの名前が、倉吉に縁の深い万葉詩人の山上憶良にちなんでいることを披露し、倉吉のまちと親としての思いをこう語りました。

「(娘が生まれた当時)仕事に疲れると、お父さんはよく、打吹山の麓、白壁土蔵のまちをぶらぶらしながら空想した。『山上憶良もきっとここを歩いたんだろうな』と。この美しい風景を見て、仕事の疲れを癒したことだろう。

就職難や少子高齢化で、この倉吉のまちは大変だけれども、１０００年以上も続いたまちは、そう簡単にはつぶれやしない。

昨年3月11日の東日本大震災で、故郷があることの大切さ、心強さをみんなが心に染みて感じたことだろう。

君が倉吉を出るにしても、残るにしても、このまちは、お父さん、お母さんと同じく、いつでも手を広げて君を待っている。だから安心して、思い切り、自分の好きな道を歩きなさい。それが20年後に贈る君への言葉です。

新成人の皆さん、新しい門出に向けて、頑張ってください」